

9月スタート「NHK Hybridcast」

大量の情報提供にシンプルさで対応

デジタル放送時代における新たな放送・通信連携サービスとして注目を集めてきた「NHK Hybridcast」^{ハイブリッドキャスト}が9月、いよいよサービスを開始した。といっても、現状は過去に本連載で取り上げたような先進的・尖鋭的な内容はさほど含まれておらず、いわば試運転のような状況。NHK側も「まずは使ってもらおう」ことに重点を置いているようなので、その意図に従い使い勝手=UIを確認させてもらうこととした。

改めて、簡単にハイブリッドキャストについて。概念的には「放送波とネット経由情報の連携」が胆であり、両者の極めて高度な同期こそがサービスの特徴である。

冒頭にも示したとおり、現状ではその能力に即したと言えるほどの内容は用意されていない。現時点でのサービスは、少々乱暴に表現すると「放送波ではなく、通信から中身を取り寄せるデータ放送」で、そこから特徴を見いだすのであれば「情報の総量・種類に上限がない」という点に尽きる。

つまり、そのデータ放送と比べ、大量となった情報をいかにして視聴者に享受してもらうか、という視点が極めて重要となり、当然のこととして使いやすさが問われるわけだ。

さて、そのUIに対する基本姿勢は極めてシンプル。「リモコンの上下左右、そして決定キーのみで操作を完結させること」（編成局デジタルコンテンツセンター副部長・笹原達也氏）だ。

この場合、やや逆説的な表現になるが「4色ボタンを使っていない」ことがポイントだ。視聴者はリモコンの当該個所に指を置いておくことで、視点移動することなくメニューやコンテンツを選択することができる。

ハイブリッドキャスト起動時における選択可能メニューアイコンは、画面内に収まっているものを数えただけで14個。実際には右にもスクロールができるため、ホーム画面段階で相当数のメニューが選択可能な仕組みとなっている。

色ボタンだけでは手に余ることは明白だが、あえてショートカットを設けず、上下左右決定キーでの選択にとどめたという判断はなかなか有効だ。少なくとも操作方法に迷う状況は起こるまい。シンプルイズベストを体現した考え方と言えるだろう。



「NHK Hybridcast」ホーム画面

表示速度に関する工夫

操作に必要なのは上下左右決定キー、としたが、最後の決定キーについては不要な場面も多い。メニューがファイルのタグのようになっているコンテンツも多く、その場合はカーソルをメニューアイコンに合わせた段階で中身が閲覧できるからだ。

そうした方式を多くのコンテンツで採用しているため、操作テンポも悪くない。「ロード時間がストレスにならないよう、最初に全データを落としてから表示を切り替える形式をある程度採用しています」（編成局デジタルコンテンツセンター・若山大輔氏）。なお、ニュースなど一部コンテンツについては、決定→ロードの方式が採用されている。

いずれの方式にせよ、どこかでロード時間は必要となるわけだが、その場面のストレス解消策として期待されているのがリモコンのボタンを押した時の反応音。NHKの音響効果セクションが中心となって作成したというその反応音は、響きに余韻を持たせることで「間を埋める効果」を狙っ

ているようだ。

シンプルゆえのデメリットも

シンプルさに徹したことで操作性に関する難点はとりたてて見当たらないが、あえて言うならば、「上下左右決定のみで完結させるにはメニュー・コンテンツが多過ぎる」ことだろうか。

一部の画面では下キーで設定メニューに遷移するなど、操作自体に覚えることはないものの、配置やデザインで覚えなければならない点が多少含まれている。今後、さらにコンテンツが拡張・進化していくことを考えると、将来にわたって今のUI方針を貫くのは難しいかもしれない。

とはいえ、コンテンツもUIも第一段階を迎えたばかり。スマホ・タブレットとの高度な連携や認証を交えた展開、そして放送・通信コンテンツの本格的同期などがスタートするのはこれからの話だ。

この段階において「シンプルなUI」に特化した方針自体は、ある程度達成されていると評価できるだろう。

